

自然保護常任委員研修会(栗駒山)

6月17(夜行)～19日、2011年度自然保護常任委員研修会が震災の爪痕色濃い栗駒山で行われた。

標高1,627メートル、東北地方のほぼ中央、宮城・岩手・秋田の三県にまたがり円錐状の裾野をもつコニーデ型火山の栗駒山は、「国定公園栗駒」の中核をなし、150種にもおよぶ高山植物群落、ブナの原生林や湿原、溪谷等々貴重な自然が手付かずのまま残され、野生鳥獣なども数多く生息している。その「自然」はこの震災でどんな影響を受けたか。今回、研修を『震災被災県の山岳に出掛け、自然の状況をそれぞれの目で実地に確かめるとともに、地元応援の意味を含め、本研修を実施する』と位置づけ、現状視察の常任委員等16名による実登となった。

18日、栗駒山の宮城県側からのメインの登山口のイワカガミ平で宮城岳連の濱田久晴会長らと合流、午前7時40分過ぎ中央コースにとりつく。登山道はコンクリートで固められ、ほぼ一直線に延びていて、入山者の多さを物語っている。ひたすら高度を稼ぎ、道が土や砂利に変わる頃、前方の視界も開けて雪渓を抱く栗駒山が見えてきた。また2度の震災の影響で現在入山禁止となっている表掛コースも間近に捉えられ、荒れた沢筋の様子が窺えた。雪解けの登山道を彩るイワカガミなど高山植物の群落に歓声を挙げながら、9時山頂着。帰路は雪渓が多く残る東栗駒コースを辿る。新湯沢の徒渉点から下部は非常に悪路となっていて、ドロコになりながらも無事にイワカガミ平に戻った。さらにニッコウキスゲやワタスゲ、レンゲツツジが美しい湿原「世界谷地」を巡り、初日の研修を終えた。

栗駒山を廻るいくつかのコースのうち、まだ再開の目処も立たない所もあると聴くが、今回歩いた中央・東栗駒コースに限って言えば、コース整備も進み、季節の移ろいを伝える花々や鳥の声が、栗駒山の自然の再生を証明し、私たちの目や耳を楽しませ

てくれた。

今回の宿泊地は新湯温泉くりこま荘。そこは、2008年6月14日に岩手県内陸南部で発生したM7.2、最大震度6強を記録した岩手・宮城内陸地震で、土石流の呑み込まれた駒の湯温泉から200m程の高台に位置し、災害救助隊の休憩所ともなり、また、栗駒山山岳指導隊の事務所も置かれ復興の活動拠点にもなっていた。復興の兆しが見えてきた矢先の3.11東日本大震災、この未曾有の2度にわたる大災害を生き抜いたご主人菅原次男氏からお話を伺うことも今研修の大きな目的の一つでもあった。

また、ここに宮城岳連浅野誠治事務局長が同宿して下さり、岩手・宮城内陸地震の貴重なビデオを見せて頂きながら、被災地では日々の生活が不自由な中、それ以外でも「自粛」が美德とされる風潮の中、山に登ること自体にある種の後ろめたさを感じるとの率直な意見や「山」を守る活動の困難さを語り合った。

翌朝、復興作業の進む駒ノ湯の跡地周辺を歩き、凄まじい崩落を物語るまっすぐ切れ落ちる断面に言葉を失い、くりこま荘のご主人の言われた「僅かな立地の違いが生死を分けた」ことを実感させられた。また街に通じる県道42号線も至る所土砂崩れ復旧工事現場となっており、未だ手つかずの崩落現場も数知れない。大震災の恐ろしさを目の当たりにしながら帰路についた。

今回、ご自身も被災されたにも拘わらず研修にご参加下さった宮城県山岳連盟濱田会長、浅野事務局長に心から感謝申し上げます。

一日も早い復興をお祈り申し上げますとともに、私たちにできる「支援」を息長く続けていくことお約束します。

(小高令子 記)



研修参加者、宿舎のくりこま荘前にて



復興工事最中の先の地震の崩落地